

難有仕合の旨各奉拜謝候て、先づ御屏風の後へ退出、此所に控可申旨兩人指圖、追付於表御座の間、三人一同に御前へ誘引、件の趣申渡候の處、難有奉存旨筑後御禮申上候處、何も入情相勤候に付、御加増三百石宛被下候。彌無油斷可相勤旨御誼有之、重疊難有仕合の旨、筑後御請申上各拜伏候て退出す。某被召出既十九年に及ぶ。朝暮近侍如此の段、冥加の至銘肝膽且はまた往々近侍はすまじき事、相如藏人かうぶり給ひてける時、よみ侍ける古ことそゞろに思ひ出で侍りけり。其歌は。

年經ぬる雲井離れて葦たづはいかなる澤に住まむとすらん
晦日。克明並某稱號依仰改之。克明號新藏某號權佐、各捧鳥目百疋御禮申上了。

一、松月寺へ詣でて
十月二日松月寺先考牌前へ參拜、獻青銅貳百疋。つくくと懷舊數回に及ぶ。

かばかりの身の嬉しさを告來ても空しく袖に露ぞ零るゝ
一、身上を省て偶成
十五日。此頃省身上而恐怖盈滿、詠一首之蜂腰。

いや高き君の恵にみちぬれば空おそろしき身の行衛かな
一、觀月亭の落葉を詠す

二十七日。於觀月亭詠落葉。
冬艸を時雨に染る落葉かな

冬枯の庭のちぐさも色かへつ雨とふりしく四方の紅葉に
一、雪を詠す
十一月十八日。

花とみむ程こそなけれ霜がれの草葉にかゝるゆきの下露
吳竹の花とも見しかいつしかにつきて軒端をうづむ白雪

山路雪

こりつみて歸る山路に雪ちればたをらぬ花をかざす柴人

遠山雪

重れる雲かと思しを空晴て雪にぞしるしをちのやまの端

山家雪

分け迷ふ道もいとほとふ人のかへさをいかに雪の山里
降積し落葉の上の今朝の雪きえずしあらば告て見ましを
一、歲暮の心を
春をまつ心のそこよ動かすばいかに今夜を惜みはつべき

室直清歲首之作

城西卜築愛幽遯。白屋迎新眺望餘。天上雲霞分晦朔。人間氷雪阻驚花。百年身耻彫蟲枝。竟日門無長者車。自是閑來春誦好。爲欣青帝到儒家。

小瀬助信歲首之作

歲月更端昌曆開。大和融液日應催。城頭樹色雲呈瑞。郊外山光雪作堆。清代由來無棄物。恩波遍處愧非才。滿盤茶酒聊隨俗。屢祝華封舉壽杯。

本多政冬歲首之作

夙起上金城。祥雲和雪明。退公酌椒酒。依舊待新鶯。淺井源右衛門政右
天地のあまねきめぐみ白雪のかゝるした草春に逢ふらん
けふをよつときはかきはの初かな

山崎半左衛門延隆

仕へこし身は老にけり新玉の年の緒ながく君をあふぎて
雪ながら年は越路の霞かな
一、春立つ日に
八日。立春。

三十あまり五の年もくれはどりあやなく過し月日なる哉
かくしつゝ終にきゆべき露の身を思ひ思はぬ年の暮かな
一、元旦人丸の像を拜して
辛未元旦。入觀月亭上香拜柿本人丸像試毫。

立春

春きぬと軒のしづくに音づれて朝戸出かすむ雪の山の端
一、早春梅を詠す
二日。早春梅。

雪ふれば咲ぬ立枝もなかりしか春こそ梅の匂ひなるらん
ちひろあるかけや色そふ松の春
伊勢物語の歌を以て爲本歌。

明て今朝かすめる外に山もなし
一、諸家歲首之作
五十川剛伯歲首之作

殘夜鐘邊盡。喚醒舊歲夢。寒光松竹外。禽語雪花中。北海
恩波瀾。南山壽色融。揮毫何所樂。吟詠坐春風。